

インタラクティブデジタルサイネージ

田中 敦* 米沢みどり**
石井 徹* 久世武知***
宮原浩二*

Interactive Digital Signage

Atsushi Tanaka, Toru Ishii, Koji Miyahara, Midori Yonezawa, Taketomo Kuze

要 旨

近年、オープンスペースに設置される情報表示ディスプレイの普及がめざましい。一方で携帯電話によるITサービスは一般ユーザーに浸透しており、両者の連携による新規ビジネスが期待される。インタラクティブデジタルサイネージ(Interactive Digital Signage:IDS)は、コンテンツ配信システムと大画面ディスプレイを用いた効果的情報提示に加え、インタラクティブ操作と携帯電話の連携で、情報のポータル機能を実現する新しい双方向電子広告ボードである。ユーザーは操作卓を使って所望する情報を表示し、その情報を携帯電話にダウンロードして持ち帰ることができる。IDS第一次試作はマルチディスプレイを用いて2005年10月に三菱電機(株)京都製作所の内覧会で発表され、新聞他に記事が掲載されるなど注目を集めた。2006年3月にはIDS第二次開発を行い、操作卓をタッチパネルから大型キータイプに変更してユニバーサルデザインに対応、また最

新携帯電話I/F適応を実現した。CEATEC JAPAN 2006では交通機関と街を組み合わせた「トレイン&ウォーク」コンセプトで映像情報システムソリューションが展示され、IDSは街のにぎわいを演出する、集う表示システムとしてクーポンサービスのデモを行った。2006年11月には東京ビル1階で1か月間の実証実験を行い、多くの一般ユーザーにIDSを体験してもらった。同時期に縦型ディスプレイ1台でパッケージ化したモデルも開発し、ソリューションの幅を広げている。このモデルは2007年3月に鉄道会社のキャンペーンに使用され、タッチラリアプリケーションを多くの一般ユーザーに楽しんでもらえた。2007年からは新機能として画像処理技術による顔画像抽出とその属性推定ソフトウェアを開発導入し、さりげないリコmendが可能となる技術としてCEATEC JAPAN 2007で展示した。本稿では想定するビジネスの検討もあわせ、IDSについて述べる。



インタラクティブデジタルサイネージ実証実験

2006年11月に東京ビル1階で行った実証実験のシステムである。DLP(Digital Light Processing)^{注1)}リアプロジェクタ8台でマルチディスプレイを構成し、上部4台が4,096×768画素の高精細画像を表示するアイキャッチ画面であり、下部左右2面ずつがそれぞれ手前に置いた操作卓でコントロールできるインタラクティブ画面である。ユーザーは大画面を見て興味を持ち、操作卓の大型キーを使って簡単に好みの情報を選択し、操作卓表面に設けた非接触センサで携帯電話に情報を持ち帰ることができる。

(注1) DLPは、米国テキサス・インスツルメンツ社の登録商標である。